

(JOS-OB NET 掲載用)

諫早大水害と長崎無線 (JOS)

諫早市城見町

わたなべまさひで
渡部雅秀

昭和 32 年 7 月 25 日、諫早大水害が発生してから、今年 (平成 29 年) で丁度 60 年になります。

水害を経験した長崎無線局の OB は、今は数も少なくなり、風化しかかっていることと思いますが、60 周年を期に、回想してみました。

私は昭和 26 年 4 月、仙台電気通信学園普通電信科へ入学、12 月に卒業し、福島電報局通信課に配属され、モースル通信による電報の送受信を担当していました。

4 年あまり勤務したのち、昭和 31 年 4 月、中央電気通信学園無線通信科に入学、第 1 級無線通信士の国家試験に合格、長崎無線電報局へ赴任したのが 22 歳の時、昭和 32 年 5 月 20 日で、諫早大水害の 2 か月前でした。

着任から 1 か月半を経過した 7 月中旬、長崎県南部は連日雨の日々が続きました。

7 月 25 日夜は、外には出られないような大雨と、真昼のような雷鳴が轟いていました。

翌 26 日早朝、独身寮で寝ていた私は、社宅の奥さんたちのざわめきの声で目が覚めました。覗いてみると 1 軒しかない野菜や食料品を売る小店の前に集まって買い物をしている様子です。寮生も起き出して、何か異変が起きているらしい、と話し合っていました。

寮生の数人が前夜、町に下りて行ったきり戻っていないことが分かりました。次第に情報が集まった結果、諫早市内は水害で壊滅状態、一夜で 700mm の猛烈な雨量のため、市内を流れる小さな本明川に架かる、石橋の眼鏡橋に大量の流木が引っ掛かり、濁流が市、中心部を襲い、家屋の倒壊・流失で足の踏み場もない大水害になっているとのこと、また上流に架かっていた長崎から鹿島方面への国道 207 号線の四面橋は、西側の道路の土が流失し、通行不能になっているとのことでした。

行方不明だった寮生達のうち、パチンコ店にいた人は、足元から水が上がって来たので急いで逃げ出し、また、飲み屋でよろしくやっていた人はママと一緒にしかるべき場所に避難して無事でした。本明川の水位は 10 分間で 2m 上昇したそうです。

この大水害により電気、水道、電話、バス、鉄道 (国鉄長崎本線、島原鉄道諫早島原間) などのインフラはすべて使用不能となりました。

諫早電報電話局も浸水し、局内設備は勿論、市内、市外回線も全滅状態でした。未曾有の大水害にもかかわらず、被害状況の報告や救助要請の連絡がとれない状況でした。

私はいつも通り無線局に出勤してみると中波席、短波席とも全席通信不能でした。愛野送信所と諫早受信所間のコントロールケーブルが浸水で使用できないためでした。中波500KHzはVHF回線を使用して回復しましたが、短波用まではチャンネルが取れません。

地元消防団団長、団員が無線局を訪ねてきて、被害状況を一報したいとの要請により、中波で下関海岸局（JCG）を呼び、通報してもらったとのことでした。後は警察無線ルートで伝送されたそうです。

船舶あての無線電報はすべて銚子無線へ転送し、長崎の代行をしてもらいました。中波席の運用以外、何もすることが無くなった私たちオペレータは、局内でうろうろするばかりでした。

無線設備の電源は愛野送信所諫早受信所とも自家発電機で当面賄えましたが、ディーゼルエンジンの燃料が心配で、送受信所は熊本から船で運搬することを検討していました。

暫くすると通信課長から呼ばれ、諫早電報電話局は浸水の水は引いたが印刷通信回線が復旧していない、長崎—諫早間に臨時の音単回線（音響単信回線）が出来たので有線通信の経験があるお前に行ってほしい、とのことでした。

早速出かけることにしました。坂道を徒歩で下って約4Km、市内に入ると泥が足に絡み、生臭いにおいが充満していました。着任して間がないので地理不案内、道行く人に電話局の場所を尋ねながらたどり着きました。1階が電報通信室、浸水した泥水のあとが乾かないまま壁に残っていました。床は濡れたままです。2階が電話交換室になっています。室内は配達応援要員などで一杯、どなたかに挨拶をして通信席に案内されました。

電鍵、タイプライター、集音箱に入った音響器、と懐かしい音単回線セットです。

長崎電報局担当者から、ツートツートツート、こちらからツートツートで受信開始。短波無線とは異なり、雑音も混信もフェーディングもない最高の回線品質です。音響器が発する歯切れのよいカチカチ音を受信していきます。電報のあて名の地名と場所は全く知りませんが、長崎から送信されてくるまま、タイプしていききました。

食事は炊き出しのおにぎりですが、遠慮して1食1個ですませました。夜、帰寮し、翌日も朝から出かけました。

3日目は長崎—諫早の印刷通信回線が復旧し、長崎無線局の短波席も使用できるようになったので、自局での勤務となりました。

災害復旧のため、自衛隊が長崎無線局より北の場所に野営していましたが、使用している無線機は中短波帯（2MHz帯）のため、ラジオ放送にモールス符号の通信がバリバリ入っていました。

後で知りましたが、日本アマチュア無線連盟の長崎クラブの機関紙によると、長崎県下の電信電話回線はずたずたに切断され、長崎、諫早、大村、島原などはつなば棧敷に追い

やられていた、と記載されていました。以下は長崎クラブの機関紙の記事抜粋です。

25日当夜、午後11時半ころNHK長崎放送局から、クラブ会員のM氏に、非常通信の依頼があり、早速「OSO(非常通信)熊本または福岡」と呼びかけ、受信に移った途端、停電となり、通信不能になってしまいました。NHKに通報したところ、300Wの発動発電機を持参してきましたが、調子が悪く26日午前1時15分頃、停電が解消したので、非常通報を送信できるようになりました。

相手局は佐世保、福岡、小倉などのアマチュア局でした。各地のNHKや新聞社は、長崎への市外回線が不通となったので、長崎のアマチュア局が出てくるのを待っていたそうです。午前1時半頃から、長崎市内の他のアマチュア局が5~6局電波を出してきて、長崎から各地への連絡に努めました。午後4時ころには、島原のアマチュア局がバッテリーとDC-DCコンバータを使用して新聞社からの新聞原稿、九州電力、検察庁、日通、島鉄バスなどからの通報を送信してきました。

長崎市内のほかのアマチュア局も、諫早税務署、長崎税務署管内の職員・家族の安否について、福岡国税局との情報連絡にあたっていました。

26日夜11時頃には、長崎—諫早間の市外回線が一部復旧し、非常通報の依頼も減少してきたので、各アマチュア局も、非常通信を止め、休息をとりました。

翌27日には、新聞社の専用線もぼつぼつ復旧し出しましたが、島原方面の公衆回線は相変わらず不通のため、島原のアマチュア局は引き続き活躍していました。

27日夕方までに、諫早局の市外回線は3回線が復旧したものの、通話輻輳のため数時間待ちの状態でした。

長崎県災害対策本部から、通信の円滑化と各機関との意思疎通を図るため、長崎クラブ会長のH氏に出動要請があり、長崎クラブとして、諫早に移動局を持ち出すことになりました。

同日夜半、災害対策本部の車で、クラブのメンバー8名が長崎を出発、翌28日午前6時頃には、諫早市の災害対策本部があった諫早小学校内にて設営完了、NHKから借用した非常電源で、長崎と連絡が取れるようになりました。また、長崎に残ったメンバーは同日早朝、県庁5階にアマチュア局を開設、体制を整えました。

昼頃、諫早の無線機の発動発電機が故障して、運用が出来なくなった時、長崎の別のアマチュア局が移動局を持って応援に駆け付け、運用を続けました。陸上自衛隊の通信班がすぐ傍で無線機を運用しているため、妨害が発生したので、お互い通信時間を決めて運用しました。

諫早では、飲料水に困り、長崎から持参した水を分け合い、炊き出しのおにぎりを戴きながら、頑張りました。

こうして諫早は29日午後2時、島原は30日夕方、非常通信が解除されるまで、災害対策本部関係の非常通報の疎通に当たりました。

後日、長崎クラブに対し、諫早市野田市長と、九州地方非常通信協議会会長から感謝状

をいただいた、とのことでした

アマチュア無線は趣味ばかりではなく、非常災害時には、被災地に身軽に出動し、すべてボランティアで情報連絡に参加しており、東日本大震災の際も、現地で活躍したことが報道されていました。

水害の犠牲者の遺体は、各地のお寺に寝かされていて、遺族の確認を待っていました。消防団員が町なかの側溝から遺体を掘り出している現場に遭遇したり、火葬場が満杯で処理できないため、空き地で材木を積み重ね、灯油をかけて焼却している姿も見ました。

水害後、色々なうわさが流れました。諫早湾外の有明海に多数のサメが現れ、水死体を食べているとか、深夜、火葬場までと、タクシーに乗った女性客が降りたら、後席のシートがびしょ濡れだったとか、まことしやかにいわれました。

当時の火葬場は無線局の西側にあり、独身寮で食事中に風向きの加減で、火葬場の煙が流れ、臭うこともありました。

町の中心から無線局に戻るには3つのルートがありますが、どのルートも必ず、わりあい大きな墓地を通らなければなりません。ある月の出ていない闇夜、北陸金沢出身の一期先輩のKさんと一緒に町から無線局に戻るため、一緒に歩いておりました。墓地にさしかかると突然、彼が私にしがみついてきました。そして震える指を差し、「あれを見ろ」といいます。なにか銀色に光っていました。人魂か、と訝りながら近づき、よく見ると、新仏を埋葬した時の祭壇の飾り物が風に揺らいでいました。固まった彼を引っ張りながら、寮までたどり着きました。

この大水害で、実際に被害を受けた長崎無線局勤務の、染岡耕作氏の手記があります。これは「長崎無線 91 年のあゆみ」に掲載されています。ご本人のご了解を得ましたので、原文のまま、転載いたします。

諫早大水害を生き延びて

昭和 31 年新婚時代に長崎無線に転勤してきました。社宅は借り上げで栄町の山田石油店裏、旧諫早藩のお姫様宅という大きな屋敷で、家を守るおばあさんと私たちを含め五所帯が間借りをしていました。私は昭和 28 年熊本洗場電報局に在任中大水害で九死に一生を得た苦い経験があります。翌 32 年 7 月までも大水害を経験することになってしまいました。7 月 25 日でした。

熊本水害を思い出すバケツをひっくり返したような雨が続きました。あの日は 10 時から 18 時までの勤務を終え夕食を済ませて一息入れた夜 9 時頃、心配になって本明川を見に行きましたが、未だ 1 メートル位は余裕があったので安心して床につきました。異常を感じ飛び起きると畳の隙間から水が噴き出しており、アッという間に畳はぶかぶかと浮き家具が倒れ、瞬く間に 2 階まで水浸しとなりました。

真っ暗闇に走る稲妻を頼りに外をみると隣近所の家がユックリと動き出し、屋根に逃げたり家の柱にしがみついたまま流されて行く人たちが見えました。闇の中に恐怖に唸り声をあげ必死に助けを求める声を聞きながらどうすることも出来ず本当に恐ろしく悔しいことでした。私たちも天井を破って屋根に出ようとしてましたが果たせず、屋根づたいに逃げました。家と家との間には雨戸を掛けて、より高い商店の屋根に必死で避難し夜を明かしました。

近くの石油店から漏れだしたガソリンが燃え上がり惨状を照らし出しましたが、その有様は伝える言葉を知りません。知人宅に遊びに来ていた佐貫さんがおばあさんを背負い全員無事であったことがせめてもの救いです。濁流に消える声を聞きながら「最早これまで。不憫だが家内とは短い縁だった」と覚悟していたのに夜明けとともにホッと涙したことを覚えています。

昼過ぎ竹中さんが見舞いに来てくれ本当に嬉しかった。ステテコ姿で局まで辿り着き庶務課長宅でご飯にかぶりつきました。当面の作業服をいただき、当時独身寮であった一号社宅の四畳半一間で再起を図ることになりました。全くゼロからのスタートで全国の組合員から 2 万円のカンパ、公社から立ち上がり資金を借り当座をしのぎました。

諫早大水害の原因を、国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所では、次のように分析しております。

- 1 本明川が被害を受けやすい地形であること
- 2 今回の雨が想定を超える大きさの雨だったこと
- 3 その雨に対して、本明川の川幅が足りず、川から水があふれ出たこと

また、多くの犠牲者を出した要因として、

- 1 夕方に一旦雨足が弱まり市民に油断が生じたこと
- 2 停電で避難勧告や指示など災害情報が伝わらなかったこと

などと分析しております。

水害後本明川は、全国で 1 番短い 1 級河川に指定され、国の直轄管理となっております。川幅は以前の 40m から 60m に広げられて、現在でも河川改修工事が行われております。

死者・行方不明者 630 人、負傷者 1,547 人、罹災者 2 万人と、実に諫早市の総人口の 30 パーセントに及びました。被害総額は当時の金額で 93 億円だったそうです。

諫早大水害の犠牲者の冥福を祈り、防災の誓いを新たにするため、諫早市と諫早商工会議所などが毎年、大水害にあった 7 月 25 日に、諫早公園前の本明川河川敷一帯で慰霊祭を開いています。本明川の裏山橋から諫早橋間の 1.8 キロ区間に午後 8 時から午後 9 時までの 1 時間に繰り広げられる暗く静寂な川面に揺れる神秘的な 23,000 個の万灯と夜空に広がる 2,000 発の花火の光と音のコントラスト。全国的にも、とても珍しい幻想的なお祭りとして

なっております。

諫早眼鏡橋は日本の石の眼鏡橋として初めて国の重要文化財に指定され、昭和 35 年、諫早公園に移設されて、観光名所の一つになっております。

おわり

(参考文献)

- 1 諫早市役所ホームページ
- 2 国土交通省九州地方整備局長崎河川事務所ホームページ
- 3 長崎無線 91 年のあゆみ 日本電信電話株式会社 長崎無線電報サービスセンタ
- 4 日本アマチュア無線連盟長崎クラブ機関紙 30 年誌
- 5 諫早電報電話局 昭和 32 年 8 月 8 日 諫庶第 599 号 「7.25 水害の概要と、その復旧経過」(復刻版 元諫早電報電話局社員、川口寿男氏作成)